



## 介護保険施設における湯灌（ゆかん：死後の入浴）の意義

|        |   |
|--------|---|
| 著者     | 宮田 澄子   |
| 発行年    | 2017  |
| 学位授与大学 | 筑波大学 (University of Tsukuba)  |
| 学位授与年度 | 2016  |
| 報告番号   | 12102甲第7984号  |
| URL    | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00147802">http://hdl.handle.net/2241/00147802</a> |

|             |                            |
|-------------|----------------------------|
| 氏 名         | 宮田 澄子                      |
| 学 位 の 種 類   | 博士（ヒューマン・ケア科学）             |
| 学 位 記 番 号   | 博甲第 7984 号                 |
| 学位授与年月      | 平成 29 年 2 月 28 日           |
| 学位授与の要件     | 学位規則第4条第1項該当               |
| 審 査 研 究 科   | 人間総合科学研究科                  |
| 学 位 論 文 題 目 | 介護保険施設における湯灌（ゆかん：死後の入浴）の意義 |

|     |        |       |                |
|-----|--------|-------|----------------|
| 主 査 | 筑波大学教授 | 斎藤環   | 医学博士           |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 玉岡晃   | 医学博士           |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 田宮菜奈子 | 医学博士           |
| 副 査 | 筑波大学助教 | 岡本紀子  | 博士（ヒューマン・ケア科学） |

## 論文の内容の要旨

宮田澄子氏の博士学位論文は、介護施設でおこなう湯灌の意義を検証したものである。とりわけ職員のターミナルケアに関する態度の実態と、ターミナルケア態度を高める要因として湯灌が持つ意義が検討されている。その要旨は以下のとおりである。

（目的）著者は湯灌が介護保険施設の職員のターミナルケア態度にあたえる影響や、家族におけるグリーフワークの意味をもつ湯灌が職員に対してどのような意味を持ちうるか、いわばケアとしての湯灌についての先行研究を参照している。湯灌の慣習は国ごとと言うよりも宗教ごとに異なるが、著者はそうした湯灌の持つ意義の違いについて、まず検討している。ついで、日本における湯灌の歴史がまとめられ、最後に現代の湯灌を巡る状況が概観されている。著者のまとめによれば、葬祭儀礼として湯灌を重視する社会とそうでない社会があり、現在では死後のケアという視点からなされているとのことである。この部分は湯灌の文化人類学的、あるいは民俗学的な視点から観ても興味深い内容や知見が数多く含まれている。ついで、高齢者施設職員の悲嘆に関する先行研究が概観され、「公認されない悲嘆」としての職員の経験にも何らかのケアが必要であることが示唆されている。

（方法）著者は、湯灌を実施している M 医療法人の常勤職員 151 名に、自記式無記名質問紙調査を 2012 年に実施した。内容は基本属性や湯灌の認知度、悲嘆に対する対処方法、および FACOD-B-J（日本語版ターミナルケア態度尺度）などであった。著者はこの結果について、多変量解析による検討を行っている。

（結果）著者によれば、ターミナルケア態度においての積極性は、「資格を 2 つ以上持っている」「湯灌経験がある」が、有意に関連していた。湯灌経験者と未経験者の死への悲嘆対応は、前者はもっと良いケアをしたいと考えて前向きであったが、後者は仕事と割り切って感情を持たない・わから

ない等の、消極的な対処方法が多いとのことであった。

（考察）著者は、資格が2つ以上ある職員は、資格を取るための学習や研修をうけていて、その影響でターミナルケア態度が積極的な可能性と、専門的な教育を受けるうちに資格が2つ以上になった可能性の2点を指摘している。教育や研修はターミナルケア態度を高めるためである。著者はまた、死に関わる教育や研修等が FATCOD B-J を高くするという研究結果から、湯灌という死へのケア・体験が、ここに影響を与えている可能性も指摘している。さらに著者は、湯灌を家族と一緒にいった方が良いかという自由記載の回答から、家族がグリーフワークとしての湯灌が行えるようにしたい、故人が家族からターミナルケアを受けてもらいたいという職員の気持ちを見出している。また著者は、家族と会話し、故人をしのびながら家族と湯灌を行う事で、職員の公認されない悲嘆が軽減され、職員にとってもグリーフワークになっていた可能性についての言及している。

（結論）著者によれば、湯灌は、多職種の前向きなターミナルケアの態度に関与しており、今後、介護系施設におけるターミナルケア・グリーフケアとして、広く検討する意義があるとしている。また、本研究の結果に基づき、湯灌に対する不安や疑問点に対応しつつ、ケアとしての湯灌の理解を深め、ターミナルケアにおける介護職の役割を広げることを構想している。

## 審査の結果の要旨

### （批評）

宮田澄子氏の博士学位論文は、「ケアとしての湯灌」の意義という特異なテーマに注目した点がまず評価できる。先行研究の文献的考察は質量ともに十分な内容であり、文化人類学的な関心からみてもきわめて興味深い。また介護保険施設における質問紙調査の結果を統計的に解析し、そこから湯灌がターミナルケアにおいて持つ意義についてきわめて示唆的な結論を導いている。

死後の入浴という、治療やケアの上は一見無意味とも思われる行為が、実は遺族のみならず介護職員のグリーフワークにもなりうるという指摘は、死者の尊厳を尊重する行為そのものがエンドオブライフケアの延長線上にある可能性を示唆するものであり、湯灌という、時代に逆行するかのような儀礼的な行為にも、ケアとして重要な意義があることを指摘した点で、まさにヒューマン・ケア科学の中核的なテーマをいっそう豊かなものにする研究として高い評価に値すると考えられる。

平成28年12月12日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。